

特 集

展望 新時代の古代ギリシア・ローマ医学史研究

今 井 正 浩*

1. 最近の古代ギリシア・ローマ医学史研究の動向

最近の古代ギリシア・ローマ医学史研究の動向には、目をみはるものがある。

その背景には、西洋古典古代を専門とする研究者たちの多くが、古代ギリシア・ローマ医学の分野に対しても深い学問的関心を寄せるようになったという事実があるように思われる。毎年刊行される古代ギリシア・ローマ医学史関係の著書・論文等の数量が、そのことを如実に物語っている。しかも、これらの著書や論文等においては、その記述や説明の内容が一昔前の論考—たとえば、フレイザーの有名な著書（1972）—と比較して、格段に詳細で正確さを増しているということも、当該分野の研究がめざましく進展してきたということを裏づけるものである。¹⁾

このような状況を生んだ要因の一つとして考えられるのは、研究者たちのまなざしが、各人が専門の研究対象とする特定の分野の枠をこえて、いわばその周辺領域にまで行きとどくようになったということである。

この傾向は、古代哲学の研究者たちの間で非常に顕著である。1970年代から1990年代にかけて、古代哲学の研究者たちにとって、長い年月をかけて自分自身の学問的関心を傾注するに値する対象と言えば、ソクラテス・プラトン・アリストテレス以外になかった。もちろん、これら三人の哲学者たちは、西洋哲学史に不動の地位を占めるビッグ・ネームであることから、現在も、世界中の研究者たちの関心を惹きつけてやまない。それと同時に、多くの研究者たちは、これまで、いわば「亜流」とされてきたヘレニズム期の哲学者たち—エピクロス派やストア派等—に対しても、同等の、むしろ、それ以上の学問的関心を傾けるようになってきている。このような動向は、以前には考えられなかったことである。その意味でも、ロング教授およびセドレー教授のこの方面への学問的貢献は、高く評価されてよい。ロング・セドレー編著『ヘレニズム哲学』（1987）が英国ケンブリッジ大学出版から刊行されたのは、ソクラテス・プラトン・アリストテレス研究が世界的に隆盛であった1980年代のことであった。²⁾ 現在、ケンブリッジ大学古典学部がヘレニズム哲学の全世界的な研究拠点の一つとして位置づけられるのは、かれらの先見性のある研究実績に負うところが大きいのである。

古代哲学の研究者たちのこうした研究視野の拡大は、かれらが研究対象としてきたものの周辺領域に位置する古代ギリシア・ローマ医学に対しても、深い学問的関心を向けさせることにつながっていった。³⁾ この傾向は、医学も哲学と同じように、古代ギリシア人の主要な文化的所産の一つであるという

* 弘前大学人文学部西洋古典学研究室 Email: masahiro@cc.hirosaki-u.ac.jp

認識のもと、広く思想文化史的観点に立つて理解する必要があるという見方が、古代哲学の研究者たちの間に浸透してきたことによるものだろう。⁴⁾

以上のことは重要な意味をもっている。わたしたちは、特定の学問研究の歴史を領域別に表現したものとして、「医学史」(History of Medicine) や「哲学史」(History of Philosophy) といった名称を、まるでそのような歴史的文脈が最初から確定的なものとして存在していたかのような前提に立つて使用する傾向がある。しかし、西洋古典古代において「医学者」とか「哲学者」と呼ばれていた人々の自己理解にふみこんで、当時の状況をとらえなおしたとき、そこには、わたしたちが想像しているのとは異なる事実が見えてくるように思われる。すなわち、医学と同時代の哲学との間の影響関係は、一般に考えられているよりも深甚であったという事実である。

論者自身は、長年にわたって、ヒポクラテス (c.460-375 BC) の医学に代表される古典期ギリシア医学と同時代の哲学・思想史との間の影響関係に重点をおきつつ、地道に研究を積み重ねてきた。⁵⁾ したがって、ここ十数年の傾向として、古代哲学の研究者たちの間に哲学の周辺領域にまで学問的関心を広げるという動きが出てきたことは、実に喜ばしいことである。けれども、残念ながら、この動きは限定的なものであって、従来の「哲学史」記述や「医学史」記述の枠組そのものを抜本的に見なおすまでにはいたっていないということも事実である。

小論では、医学と同時代の哲学を関係づける興味深い事例に論及することによって、西洋古典古代において、医学と哲学との間の影響関係はきわめて深甚であったという事実を再確認したい。そして、当時の医学者たちと哲学者たちがどのような自己理解に立っていたかという問いを提起したうえで、この問いの解明のためのいわばモデル・ケースの一つとして、以上の事例を位置づけることによって、古代ギリシア・ローマ医学史研究の新たな可能性というものを展望してみたい。

2. 人体の中枢器官をめぐる西洋古典古代の論争史

ここ数年、論者がもっとも力を入れて取り組んできたのが、人体の中枢器官をめぐる西洋古典古代の論争史の解明である。

脳が人間の認識活動と運動機能をつかさどる人体の中枢器官であるということは、現代においては、もはや疑う余地のない事実である。しかし、ヒポクラテスが登場した前5世紀においては、状況は違っていた。ヒポクラテスの時代には、心臓（または横隔膜）を人体の中枢器官として位置づけるという心臓中心説 (cardiocentrism) が脳中心説 (encephalocentrism) と対立し、激しい論争を引き起こしていた。ヒポクラテス自身は後者の立場に立っていたのに対して、心臓中心説のほうは、前4世紀に入って、アリストテレスという最有力の支持者を得たことから、その後の論争史において大きな影響力をもつことになるのである。⁶⁾

この論争は、ヘレニズム期の哲学者たちや同時代の医学者たちへと受けつがれていった。ヘレニズム期の医学と言えば、初期アレクサンドリアの医学者たちによる脳の構造と機能の解明、血管系と区別される神経系組織の発見ということが、この時期の医学を特長づける出来事として強調されている。カルケドン出身のヘロピロス (c.330-250 BC)、ケオス島出身のエラシストラトス (c.320-240 BC) が、これらの医学上の発見の主導者として高く評価されてきた。⁷⁾ ヘロピロスはボスポロス海峡沿岸の都市カルケドンの出身で、ヒポクラテスの属していたコス医学派の医師プラクサゴラス（前4世紀後半）に師事して医学を学んだ。プラクサゴラスという医師に関して有名な医学史上の事実としては、アリストテレスによってすら区別されていなかった静脈系と動脈系を明確に区別したこと、さらにアリストテレスの影響を受けて、ヒポクラテスの時代から脳中心主義が主流であったコス医学派の中に、心臓中心主義にもとづく人体モデルを導入したということである。⁸⁾ これに対して、ヘロピロスは、医学の師プラクサゴラスの提唱する心臓中心主義にもとづく人体モデルを斥け、ヒポクラテスの脳中心主義の正

当性を解剖（アナトマイ）という医学的手法によって実証したのである。プラクサゴラスとヘロピロスとの間のこの点をめぐる確執（？）は、かつて両者は師弟の間柄であっただけに、かなり激しいものであったと想像される。

ここで興味深いのは、ヘレニズム期の代表的な哲学派の一つにあたるストア派が、いわゆる「神経の発見」（The Discovery of the Nerves）という出来事以降も、依然として、アリストテレスの流れをくむ心臓中心主義の立場をとっていたという点である。このことは、わたしたちにいささか意外な印象を与えるかもしれない。ストア派は初期アレクサンドリアの医学者たちの学問的功績について何一つ知らなかったのか。決してそうではない。むしろ、かれらは人体の中枢器官をめぐる当時の論争にきわめて積極的に関与していた。今日、西洋医学史において画期的であったとされている大発見も、人体の中枢器官をめぐる当時の論争に対して決着をつけるにはいたらなかったということである。

この論争へのストア派の関与は、この哲学派の創始者とされるゼノン（c.334-262 BC）にさかのぼる。ローマの有名な医学者ガレノス（129-c.210）は、主著『ヒポクラテスとプラトンの学説』の中で、ゼノンの主張を引用している。

音声は気管をとおして発せられる。かりに〔音声〕が脳から発せられるのであれば、気管をとおして発せられることはないだろう。言論（ロゴス）が発せられる場所から、そこから音声も発せられる。言論は精神（ディアノイア）から発せられる。したがって、精神は脳には存在しないということになる。⁹⁾

この一節において、ゼノンは、有意味な音声（＝言論）が胸部から気管をとおして発せられるという事実にもとづいて、言論の発信源にあたる精神（ディアノイア）の座は心臓であって脳ではないと主張している。この主張は、精神または魂（プシューケー）は心臓ではなく脳に座をしめているとする脳中心主義に対する批判として受けとめることができるだろう。

興味深いことに、音声の発生メカニズムに関する議論は、初期ストア派を代表する哲学者の一人で、ストア派の第三学頭となったクリュシッポス（c.280-206 BC）に引きつがれている。ガレノスは、クリュシッポスの著作（おそらく『魂について』）の中から、以下のような一節を引用している。

けれども、わたしが述べたように、以上のことが容認されたとしても、それら（神経？）が伸びる方向にそって、その始まりが頭部から先述した部分（胸部）に向かうというわけでは決してないということのほうが、かれらにとっては、万事につけて重要である。

さらに探究することにしよう。音声は胸部から気管をとおして発せられるのは、頭部から何らかの性質の始動が生じるためであるという点について、かれらが主張するであろうことは、〔魂の〕指導的部分（ヘーゲモニコン）は心臓に存在するのに対して、運動の始まりは頭部に発ずるとしても、同様に主張することができるのである。¹⁰⁾

ここで、クリュシッポスは、ゼノンの議論を引きつぐかたちで、脳中心主義に立った初期アレクサンドリアの医学者たちの人体モデルに対して批判を展開している。以上の一節は、この哲学者が「神経の発見」という医学史上の画期的な出来事について正確に知っていたということを示す証拠にあたるものとして、研究者たちの間で注目されてきた。残念なことに、この一節中には「神経」を意味するギリシア語（τὰ νεῦρα）が明記されているわけではない。けれども、後続のガレノスの解説部分をとおして、そのように理解することは可能である。

ここで、クリュシッポスは、音声の発生メカニズムに関する医学者たちの原理的説明（ゼノンの主張

に対する反論を含んでいたと思われる）を批判している。音声は胸部から気管をとおして発せられるのは、その指令が頭部から神経を経由して胸部に達することによるという医学者たちの説明は、心臓中心主義にもとづくクリュシッポス自身の魂論を受け入れる余地を残しているというわけである。というのも、この場合の神経の活動自体については、ストア派の説によれば、心臓に位置するとされる魂の指導的部分（ヘーゲモニコン）に起因すると主張することも可能だからである。

以上の一節は、人体の中枢器官をめぐるヘレニズム期の論争にクリュシッポス自身が深く関与していたということを明らかにしている。しかも、その論争相手というのは「神経の発見」に代表されるような、西洋医学史において数多くの画期的な功績をあげたとされる初期アレクサンドリアの医学者たちであったということである。さらに、これらの医学者たちがおもに関心を置いていたのが、音声の発生メカニズムをめぐるストア派のゼノンの主張であったとするわたしの診断が正しいとしたら、以上の論争にかかわった人々は、論争の相手が医学者であるか哲学者であるかということについては、ほとんど問題にしないかたちで、たがいにホットな議論を戦わせていたということになる。

ここで、ゼノンの生没年（c.334-262BC）をヘロピロスおよびエラシストラトスの生没年（c.330-250BC/ C.320-240BC）と比較してみたい。すると、三者は同時代人であったということがわかるのである。しかし、残念ながら、以上のような論争史の文脈にそって、三者を年代的に関連づけて記述した著書や論考は、わたしの知るかぎり、皆無である。言いかえれば、従来の哲学史記述や医学史記述には、年代的にみて同時代人であったはずの三者を、かれらに共通する問題関心にそって、相互に関係づけるという発想自体がなかったということになる。

3. むすびにかえて—古代ギリシア・ローマ医学史 研究の新たな可能性

以上、初期アレクサンドリアの医学者たちとストア派との関係に重点をおきながら、人体の中枢器官をめぐる論争史の一端に光をあててみた。この論争は、ギリシア思想史においては、ヒポクラテスが登場した前5世紀にさかのぼることができる。その時代において、多くの著名な医学者たちや哲学者たちを交えながら、ホットな議論へと発展していったのである。

この論争の初期段階を形成する出来事として重要なのは、脳中心主義の立場に立つヒポクラテスをアリストテレスが批判の対象にしているという事実である。¹¹⁾ 両者は西洋医学史および西洋哲学史に登場するビッグ・ネームとして、二千年以上にわたって、それぞれの分野の専門研究者たちの間で、深い学問的関心の的となってきた。しかし、その一方で、従来の医学史記述や哲学史記述には、この両者がともに関心を向けていた諸問題をとおして、かれらの学問的功績を内在的に関係づけるといった視点自体が存在していなかったように思われる。従来の医学史記述や哲学史記述において、そうした視点が欠如していたということは残念なことである。かれらの学問的関心に対して正しい評価を与えるという目的にそって、両者の関係を考えた場合、これは明らかに片手落ちであると言うほかない。

このような反省のもとに、現在、わたくし自身が取り組んでいるのは、従来の医学史記述の枠に囚われることなく、医学と同時代の哲学を密接に関係づけることを可能にするような新しい文脈を一つでも多く開拓することである。人体の中枢器官をめぐる論争史の文脈は、医学と同時代の哲学との関係を内在的にとらえなおすという観点に立った場合、古代ギリシア・ローマ医学史研究に向けた新たな試みの中で、最も有望なモデル・ケースの一つになると思われる。

わたしがそのように考えるのは、人体の中枢器官の位置・構造・機能等についての解明ということが、数世紀にわたって、多数の医学者たちと同時代の哲学者たちに共通する課題であったという理由によるだけではない。そこから一步ふみこんで、以上の論争に関与した医学者たちや哲学者たちの議論の内容に目を向けたとき、医学と哲学との間に密接な影響関係が存在したということが確固とした事実として

一層顕在化してくるからである。医師プラクサゴラスが心臓中心主義に立った人体モデルをコス医学派に導入したことが哲学者アリストテレスの影響によるものであったということについては、すでに述べたとおりである。一方、ガレノスの報告によれば、医師プラクサゴラスの人体モデルについては、ストア派の哲学者クリュシッポスが心臓中心主義に立った魂論を展開する場合に依拠したとされている。¹²⁾

このように、この論争に関与した医学者たちや哲学者たちは、自説を展開するために有利であると思われる論拠や証拠にあたるものについては、これらを相手の陣営に積極的に求めたということである。そこには、医学者たちと哲学者たちが、自分自身の議論を立論する段階において、すでに相互に影響を与え合っていたという事実がうかがえる。以上のような傾向は、人体の中枢器官をめぐる論争にかぎったことではなく、むしろ、西洋古典古代の文化的特質の一つとして、初期ギリシアの哲学者たちにさかのぼることができる。¹³⁾ 医学者たちと哲学者たちの議論内容を構成しているものが具体的に何であるかということを確認に見きわめることも、医学と同時代の哲学との間の影響関係の内実にせまるという目的にかなっているという意味において、きわめて有効であると思われる。

以上のような地道な作業によって、わたしが最終的に目指しているのは、従来の医学史・哲学史といった枠組をこえて、両者を通底するような、まったく新しい古代ギリシア・ローマ医学史研究の可能性を探ることである。医学者たちと同時代の哲学者たちに共通する問題関心にそって、医学史と哲学史をたんに相関させていくということにとどまらない。そこから一歩ふみこんで、両者が共通の問題関心をもつにいたった思想的背景に注目することによって、西洋古典古代という時代の文化的特質を明らかにしていくことである。それはまた、医学と哲学がともに古代ギリシア世界に誕生したのはなぜかというきわめて重要な問いに対して、明確な回答を与えることにもつながるのではないか。

文献と注

- 1) P. M. Fraser, *Ptolemaic Alexandria*, 3 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1972). アレクサンドリア医学に関する論述としては、同書第一巻 pp. 338-376 を参照。これに対して、V. Nutton, *Ancient Medicine* (London: Routledge, 2004) は、古代ギリシア・ローマ医学史の総論として、21 世紀初頭に刊行された記念碑的業績の一つである。
- 2) A. A. Long and D. N. Sedley (eds.), *The Hellenistic Philosophers*, 2 vols. (Cambridge: Cambridge University Press, 1987). これに先立つ 1974 年に、ロングは *Hellenistic Philosophy: Stoics, Epicureans, Sceptics* (London: Duckworth, 1974) [『ヘレニズム哲学—ストア派、エピクロス派、懐疑派』 金山弥平訳 (京都大学学術出版会、2003 年)] を刊行している。日本語版の緒論の中で、ロングは、本書執筆に着手した 1970 年代には「ヘレニズム期の哲学者たちに関する研究はほとんどなされていなかった」と述懐している。
- 3) G. E. R. Lloyd, *Early Greek Science: Thales to Aristotle* (London: Chatto & Windus, 1970) [『初期ギリシア科学—タレスからアリストテレスまで』 山野耕治・山口義久訳 (法政大学出版局、1994 年)] は、ヒポクラテスに代表される古典期の医学も視野に入れた、古代ギリシア哲学・思想史の展開についての論考であり、最近の古代哲学研究の動向を先取りしたものとして、高く評価されてよい。
- 4) このような見方は、最近のガレノス研究において顕著にみられる。一例をあげると、C. J. Gill, T. Whitmarsh and J. Wilkins (eds.), *Galen and the World of Knowledge* (Cambridge: Cambridge University Press, 2009) は、ガレノスを医学者としてだけではなく、帝政期ローマを代表する思想家の一人として位置づけるという視点に立った最新の研究成果である。なお、ガレノス研究の最近の動向に関しては、拙論「ガレノスと古代ギリシア・ローマ医学史研究の現在—ガレノス『解剖学論集』の刊行によせて—」『日本医史学雑誌』第 58 巻第 3 号、2012 年、385-388 頁を参照。
- 5) この方面の研究成果にあたるものとしては、拙論「ポリュボス『人間本性論』におけるエンペドクレスの影響—前五世紀ギリシアの医学思想と同時代の自然哲学についての一考察」『科学史研究』第 45 巻 (No.237)、2006 年、11-22 頁、および「ヒポクラテス『伝統医学論』第 20 章における

反哲学的人間観—前5世紀ギリシアの医学思想における人間理解をめぐって」『科学史研究』第46巻 (No. 242)、2007年、78-90頁などを参照していただきたい。

- 6) ヒッポクラテスの脳中心説については、『神聖病論』第16章 (Jones版では第19章) [*Oeuvres complètes d'Hippocrate, traduction nouvelle avec le texte grec en regard*, 10 tomes (Paris, 1839-1861), VI, pp. 390-392]。『神聖病論』を収めたヒッポクラテス医学文書については、上記のリトレ版を底本とした詳細な解説・索引・文献目録等を付した翻訳が刊行されている。『ヒポクラテス全集』全3巻 (エンタプライズ社、1985-1988年)。アリストテレスの心臓中心説については、『青年と老年について』第3章 469a10-16を参照。
- 7) ヘロピロスとエラシストラトスの医学については、『哲学の歴史』第2巻 (中央公論新社、2007年) 中の拙論「V. ヘレニズム期の科学思想—3. アレクサンドリアとローマの医学」 (同書 316-349頁) の中で詳しく論じているので、関心のある方は参照していただきたい。
- 8) プラクサゴラスとアリストテレスの関係については、M. D. Grmek (ed.), *Western Medical Thought from Antiquity to the Middle Ages*, translated by A. Shugart from the Original Italian Version (Cambridge MA: Harvard University Press, 1998), pp. 75-81を参照。
- 9) Galen, *De placitis Hippocratis et Platonis* [PHP], II 5, Phillip De Lacy (ed.), *Galen: On the Doctrines of Hippocrates and Plato*, Corpus Medicorum Graecorum, V 4,1,2 (Berlin: Akademie Verlag, 1984), p. 130. キューン版『ガレノス全集』[C. G. Kühn (ed.), *Claudii Galeni Opera Omnia*, 20 vols. (Leipzig, 1821-1833)] では、第5巻 241頁。ガレノスの本書 (第1巻から第5巻まで) に関しては、詳細な注を付した日本語訳が出版されている。『ヒッポクラテスとプラトンの学説1』内山勝利・木原志乃訳 (京都大学学術出版会、2005年)。
- 10) Galen, *PHP*, II 5 [Kühn, V, pp. 254-255; De Lacy, pp. 140-141].
- 11) この問題については、2012年に日本科学史学会刊行の欧文誌に発表した以下の論考において、詳細にわたって論じているので、関心のある方は参照していただきたい。Masahiro IMAI, 'Aristotle on the Debate about the Central Organ of the Human Body in the 5th and 4th Centuries BC', *Historia Scientiarum: Journal of the History of Science of Japan*, Vol. 22-1 (2012), pp. 1-21.
- 12) Galen, *PHP*, I 7 [Kühn, V, p. 189; De Lacy, p. 82].
- 13) 初期ギリシア哲学者たちの教説や作品断片の中に数多くみられる生物学や胎生学への論及は、かれらが医学的な問題領域に対しても深い関心を寄せていたという事実を端的に示している。この点については、パルメニデスの作品断片 (H. Diels & W. Kranz (Hgg.), *Die Fragmente der Vorsokratiker*, 3 Bde., 6. Aufl. (Berlin, 1951-1952) [DK] 28B17-18) やアナクサゴラスの教説 (DK59A107-111) を参照。ディールス・クランツの上記の研究書に関しては、日本語の翻訳が刊行されている。『ソクラテス以前哲学者断片集』内山勝利他訳 (岩波書店、1996-1998年) を参照していただきたい。